

ドイツと日本の建築文化の違い

余田 徹太

はじめに

今回のアウクスブルク市派遣では、さまざまな建築物を見学しました。歴史的な建物から現代的な施設まで、どれも個性的で興味深く、建物がその土地の文化や人々の暮らしにどのように関わっているのかを深く考えるきっかけになりました。本報告書では、ドイツの建築について、日本の建築との違いを交えながら述べていきます。

フッガーライ

フッガーライは、世界最古の現存する社会福祉住宅として知られており、アウクスブルク市にある歴史的な居住地区です。フッガー家によって1521年に設立され、現在でも約150世帯が暮らしています。この住宅地は、経済的に困窮した人々を支援するために作られたもので、住人は年間たった1ユーロという象徴的な家賃で住むことができます。



フッガーライ

フッガーライの建物は、整然とした街区に配置されており、赤い屋根や緑の木々が美しく調和しています。住宅は小さな庭を持ち、住人が静かで快適な暮らしを送れるよう設計されています。このように「社会的な役割」を重視した建築は、日本ではあまり見られません。日本の公営住宅や集合住宅は機能性を重視する傾向が強く、フッガーライのように歴史的な価値を持ちながらも人々の暮らしを支える建物は珍しいです。

また、フッガーライでは建物自体が観光地としての役割も果たしており、歴史と実用性が融合したモデルケースとして注目されています。日本でも、こうした社会福祉的な建築がもっと増えることで、地域の文化を守りつつ人々の暮らしを支える仕組みが生まれるのではないかと感じました。

ヴィース教会

ヴィース教会は、アウクスブルクから少し離れたバイエルン地方の田園地帯に位置する、ロココ様式の巡礼教会です。外観はシンプルで白を基調としたデザインですが、内部に入るとその豪華さに圧倒されました。天井にはフレスコ画が描かれ、壁や祭壇は金色の装飾や彫刻で彩られています。

教会の大きな窓からは自然光が差し込み、内部を明るく照らしています。特に印象的だったのは、光によって装飾の美しさがさらに引き立つ点でした。日本の寺院建築では薄暗い空間が神秘的な雰囲気を生み出しますが、ヴィース教会のように明るさで神聖さを表現する建築は、日本の宗教建築にはあまり見られない特徴です。

また、教会が自然豊かな田園地帯に建てられている点も印象的でした。建物と自然が一体となって訪れる人々に穏やかな時間を提供しており、このような調和の取り方は日本の建築にも取り入れられるのではないかと感じました。



ヴィース教会外観



ヴィース教会内装

ノイシュヴァンシュタイン城

ノイシュヴァンシュタイン城は、山の斜面に建つその姿がまるで絵画のような美しさを持つ城であり、バイエルン王ルートヴィヒ2世によって19世紀に建設されました。この城はネオゴシック様式で設計されており、ディズニー映画の城のモデルにもなったことから、多くの観光客が訪れる場所でもあります。

城内を見学して印象に残ったのは、各部屋のテーマ性です。特に、ワーグナーのオペラをモチーフにした装飾が至る所に施されており、建物全体が一つの物語を綴って

いるようでした。このような芸術性の高い建築は、日本の城ではあまり見られないものです。日本の城は、防御や権威の象徴としての役割を持つことが多く、ノイシュヴァンシュタイン城のように個人の夢や芸術的なビジョンを反映した建物とは異なる設計が見られます。

また、ノイシュヴァンシュタイン城は観光地としても非常に重要であり、その存在が地域経済に大きく寄与している点も印象的です。



ノイシュヴァンシュタイン城

アウクスブルク大学

アウクスブルク大学は、現代的なデザインが特徴的な大学施設です。キャンパス内の建物はガラス張りが多く、自然光を積極的に取り入れる設計がされています。これにより、明るく開放感のある空間が作り出されており、学生が快適に過ごせる環境が整っています。

大学の設計で特に印象的だったのは、建物間をつなぐ広場や通路が広々としてお

り、学生同士が交流しやすいような工夫がされている点です。日本の大学では効率性を重視した設計が多いですが、アウクスブルク大学では空間のゆとりを重視しており、学びの場としてだけでなく、リラックスできる空間としての役割も果たしているように感じました。

さらに、学生の意欲を高めるための設備や緑化された屋根が採用されているなど、環境への配慮が見られる点も印象的でした。このような持続可能性を意識した設計は、日本の大学建築でも積極的に取り入れるべきだと感じました。



アウクスブルク大学内の池

日本との比較

今回訪れたフッガーライやヴィース教会、ノイシュヴァンシュタイン城、アウクスブルク大学には、それぞれの建物が地域の文化や歴史に深く根ざしている点が共通していました。一方で、日本の建築文化と比較すると、多くの違いも見られました。

例えば、ドイツでは歴史的建造物を長く使い続けることが重視されており、フッガーライのように現在でも機能し続ける建物が多くあります。一方で、日本では建物の建て替えが一般的であり、耐震性や機能性が重視される傾向があります。また、自然光の取り入れ方や空間の広さなど、設計思想にも大きな違いがありました。

こうした違いは、気候や文化、社会のニーズの違いに起因していると思いますが、どちらの文化にも学ぶべき点があると感じました。ドイツの建築文化が持つ歴史的価値の保存や環境への配慮は、日本でも取り入れるべき要素です。一方で、日本の効率的な設計や空間利用は、ドイツにおいても参考になる部分が多いのではないかと思います。

まとめ

今回の派遣を通じて、アウクスブルク市やその周辺地域の建築物を見学し、それぞれの建物が持つ独自の魅力と価値を深く理解することができました。フッガーライの社会的役割やヴィース教会の明るさ、ノイシュヴァンシュタイン城の芸術性、アウクスブルク大学の現代性は、どれも日本とは異なる視点で設計されており、土地の大きさや日照時間も起因していると考えられます。

これからの建築文化を考える上で、ドイツと日本の良い点を取り入れ、お互いに学び合うことが重要だと感じます。